

第4回滋賀県多職種連携学会研究大会 報告書

学会テーマ：地域共生社会に向けた自立支援

開催日時：令和元年12月14日（土） 10:00~16:30

学会長：越智眞一（一般社団法人滋賀県医師会 会長）

実行委員長：清水和也（一般社団法人滋賀県病院協会 副会長）

参加者：133名

開会式

学会長挨拶（ビデオレターにて）

基調講演

テーマ：『生きること 作ること 声を聞くこと』

講師：坂口 恭平 氏（作家、建築家、音楽家、画家）

座長：川上 寿一 氏（滋賀県立リハビリテーションセンター 所長）



企画演題①～スポーツ分野～

テーマ：『スポーツを通じて共に生きる社会を目指す』

発表者：江川 拓馬 氏（ライトニング滋賀：ボッチャ）

大西 遼馬 氏（競技アシスタント：ボッチャ）

山岡 彩加 氏（公益社団法人日本ボート協会パラローイング委員会：ボート）

伊勢坊 美喜 氏（滋賀県障害者スポーツ協会・滋賀県障がい者スポーツ指導者協議会）

座長：麻生 伸一 氏（一般社団法人滋賀県医師会 理事）



（大西氏）



（山岡氏）



（伊勢坊氏）

企画演題②～就労分野～

テーマ：『働くことを通じて共に生きる社会を目指す』

発表者：当事者の立場から 松江 里美 氏（重度身体障害の当事者）

支援者の立場から 森本 信吾 氏

（特別養護老人ホームヴィラ十二坊・小規模特別養護老人ホーム百伝の杜 施設長）

座長：清水 和也 氏（一般社団法人滋賀県病院協会 副会長）



（松江氏）



（森本氏）

演題発表

15 演題（口述発表）



演題分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
自己実現を目指した多機関連携	滋賀県 保健所長会 切手 俊弘	1	通所リハビリにおいて自動車運転支援を行い介護保険卒業に至った事例 ～自動車教習所と連携した事例～ 地域包括支援センターいぶき通所リハビリテーション 大宮 佑介
		2	訪問リハビリ指導を受けて開始したプログラムとその成果 障害者生活介護事業所 藤本 祐司
		3	滋賀県における異状死者遺族に対する心のケアの活動について 滋賀医科大学法医学 中川 季子

（座長コメント）

様々な職種からの発表を拝聴でき、いろいろなアプローチや考え方があることを再認識いたしました。発表者は、その裏側をまとめることで、さらに今後活用できる工夫や発想につながると考えます。また、会場からの質問を受けて、深みが増す発表になりました。自分の普段は知らない世界（分野）も勉強できるのが、多職種連携学会の良い所だと思いました。座長の機会を与えていただき、ありがとうございました。

演題分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
自己実現を目指した多	滋賀県社会 福祉協議会 谷 佳代	4	ふだんのくらしをしあわせにリビングウィルの実現と可能性を信じ支える 医療法人弘英会 さくらテラス（通所介護） 倉橋 美穂

		5	生きがいてすごい！！～8年振りの登山に向けた取り組み～ 介護老人保健施設 B・O・H ケアサービスセンター 轟 絃子
--	--	---	--

(座長コメント)

演題番号4では、専門性を活かした多方面からの関わりによって生活の安定を図り、本人の人生観を尊重しながら喜びや楽しみを探っていった。演題番号5では、ともすると”夢”で終わらせてしまいそうな本人の思いを支援者たちがしっかりと受け止め、介護サービスの枠にとらわれずにボランティアも含めた支援体制で取り組んだことにより思いを実現した。特に実際の登山動画での「支える側－支えられる側」の関係から「目標を成し遂げようとする仲間」に関係が変容していく様子は印象的だった。

いずれも常に本人主体の支援に努め、目標に向けて段階を踏みながら着実に取り組んだ支援チームの力であろう。このような取り組みが特別なチャレンジではなく、広く普及されることを期待したい。

演題分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
研究・人材育成	滋賀県 看護協会 西井美恵子	6	多様な生活課題への効果的な社会資源活用 -フォーマルインフォーマルサービスの連携から- 日本福祉大学大学院 医療・福祉マネジメント研究科 研究生 岩本 由香里
		7	現任教育による多職種連携実践能力向上について 滋賀県立リハビリテーションセンター 川上 寿一
		8	重度麻痺側上肢を補助的上肢へ移行する通所施設のプログラム開発 -合目的動作と電気刺激療法の併用(事例報告)- 株式会社ジッセント・シップ 坂梨 仁勇

(座長コメント)

医療の高度化により、また、地域包括ケアの充実に向け、従来の専門職の連携だけでは多様なニーズに対応することが困難な状況がある。社会資源としてのインフォーマルサービスの活用と連携や多職種連携教育を受けていない場合、現任教育の内容検討と評価指標の明確化、脳卒中による重度の麻痺側上肢（使わない手と認識された手）へのアプローチと、今まで焦点が当てられていない部分に着目し、研究・挑戦に取り組まれた報告で合った。現状を把握し、患者・家族の生活の質向上を目指して取り組むことは有意義であり、多職種で考える機会は重要であると再認識した。

演題分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
研究・人材育成	滋賀県 歯科医師会 大西 啓之	9	地域包括口腔ケアシステムの構築を目指して 竜王町国民健康保険診療所（歯科）/歯科保健センター 小島 宏司
		10	滋賀県吃音臨床アンケート調査ならびに幼児吃音臨床における 地域連携の取り組み 滋賀医科大学医学部附属病院 リハビリテーション部 川見 員令

(発表コメント)

地域の顔の見える関係づくりを上手に利用し、各々の専門的知識を少しでも共有しながら、お互いが社会資源としてしっかりと機能している。2つの発表共にまだ地域限定で実施されているが、滋賀県においては重要な連携事業なので、県下全域に広げてもらいたいと思う。県下に暮らしている「困り感」を持っている人達に我々医療福祉に係わる者が自分達の得意分野をしっかりと県民に還元できる社会づくりのためにこの学会に頑張ってもらいたい。

演題分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
在宅生活を支える連携	滋賀県 理学療法士 会 川崎 浩子	11	重度パーキンソン病入所者に対する誤嚥性肺炎の再発予防に向けた取り組みについて 介護老人保健施設ケアセンターこうせい 柴田 祐暉
		12	うまいことごっくんできない感じなんです ～何気ない変調を見逃さない仕組み作り～ デイケアくさの川 福宮 智子
		13	「口から食べる」を続けるために多職種協働について 浅井東診療所 デイケアくさの川 小川 夏希

(座長コメント)

食事は、すべての人に毎日繰り返される生活行為であり、口から摂取することは、QOLにも直結する。一方で、誤嚥が起これば肺炎を引き起こす原因となり、生死にかかわるリスクとも隣り合わせとなっている。このセッションでは、会場がいっぱいになる程の参加者が集まり、この領域への関心の高さと、医療・福祉・介護の現場では、どのように支援していくか共通の課題であることが伺えた。

発表された3つの課題では、多職種がそれぞれの専門性を活かし、多様な視点から評価することで問題点を多角的に分析し、より良い解決策に導くことができた取り組みが示された。特に演題

番号 12 の発表で紹介された KT バランスチャートは、レーダーチャートを用いて結果を表すことで、直感的に全体像を把握できるもので、簡易に実施できることから、嚙下障害の早期発見のスクリーニングとして、様々な施設でも取り入れることができるツールではないかと思われた。さらに、今後、経過の記録や情報提供のツールとして活用の範囲を拡げられるものとして可能性を感じた。

素晴らしい取り組みをしている施設を手本に、嚙下障害への支援の How to の例が共有されれば、専門職がいない施設においても、より良いケアにつなげられるのではないかと今後に期待できるセッションだった。

演題 分類	座長	演題 番号	演題および筆頭演者
在宅生活を 支える連携	滋賀県介護 支援専門員 連絡協議会 岡戸佳恵美	14	多職種との連携による薬剤師の在宅介入 滋賀県薬剤師会 会営薬局 野村 政子
		15	在宅におけるリハビリテーションと多職種連携 -離床の拡大に難渋した一症例- 長浜市立湖北病院 リハビリテーション技術科 稲舘 清人

(座長コメント)

地域において医療の専門職が対象者の在宅を訪問し、直接介入をおこなうことは、結果として対象者の生活の質を上げることに繋がる可能性が高く、多様な視点により今後起こりえる問題の種を発見し、早期介入が行えるという利点もある、今回は、薬剤師による早期の服薬ケア、理学療法士による環境調整を多職種で関わり、対象者の在宅生活の質の向上に至ったという実践報告であった。今後このような取り組みがさらに多くなることを期待したい。また、ここで大切なことは、医療・介護・福祉の専門職が対象者の問題解決のための課題を協議・共有できる場づくりであった。この場づくりに私達、介護支援専門員が積極的に関わっていただければと思った。

作業所販売

- ・社会福祉法人 白蓮 もりやま作業所
- ・手づくり工房 種芸（しゅげい）



体験ブース

ボッチャ体験 （滋賀県障がい者スポーツ指導者協議会）



表彰式

学会長賞

演題番号5 生きがいてすごい！！～8年振りの登山に向けた取り組み～

介護老人保健施設 B・O・H ケアサービスセンター 轟 紘子 氏

閉会式

実行委員長挨拶

新聞掲載

令和元年 12 月 15 日（日） 京都新聞（朝刊）掲載